

〔資料紹介〕

北海道立図書館蔵 「精神修養資料」 函館戦争実況場面解説

濱口裕介

〈解題〉

1

大正六年（一九一七）から一五年（一九二六）にかけての九年間、函館五稜郭公園内には五稜郭懐旧館という私設の歴史資料館が営まれていた。これは、箱館戦争当時の様子を再現した等身大の生人形によるジオラマ「函館戦争実況」を中心とし、あわせて当時の模様を描いた絵画資料や砲弾・軍服などの実物資料を展示するという施設であった。館主として運営に当たったのは、片上楽天という人物である。

この懐旧館という施設については、『函館市史』をはじめとする地方史誌においてもほとんど言及されず、こんにちでは知る人も少ないように思われる。近年まで楽天のような在野郷土史家の活動に光が当てられる機会は少なかったため、評価される機会もなかったのである。

しかし、懐旧館の活動の意義は決して小さくないと筆者は考えている。たとえば、懐旧館閉館後も現在の五稜郭タワーに至るまで、五稜郭周辺では箱館戦争をジオラマによって表現した民間の歴史展示施設が脈々とつづいている。ここからは、見世物の一形態だったジオラマを歴史展示の手法に取り入れ、五稜郭という歴史遺産を観光振興に役立てようとした懐旧館の基本設計の先見性、またその影響の大きさを見て取ること

ができるのではないだろうか。

筆者は、かつてこの忘れられつつあった資料館に着目し、その意義を論じたことがある。¹ただし、そこでは展示の詳細について触れる紙幅がなかった。

そこで本稿では、懐旧館の展示解説ともいうべき北海道立図書館蔵「養料函館戦争実況場面解説」を全文紹介し、若干の検討を加えることで、懐旧館の展示の概要を紹介したい。なお、印刷物ゆえ、写真を掲載すれば事足りるところなのだが、かなり細かい字で書かれているため、本稿では全文を翻刻することとする。また、あわせて関連資料も紹介し、今後の研究の利用に供したいと思う。

2

北海道立図書館が蔵する「養料函館戦争実況場面解説」（以下、本資料 請求記号：P210.51/KA）は、一枚物の印刷物で、法量は縦一五cm×横四二cm。両面刷りで、折りたたんで配布することを前提とした、いわゆるリーフレットの形態である。北海道史研究者として知られる河野常吉の旧蔵品であり、表紙には「河野文庫」の印記が見られる。

内容は「立案者 片上楽天」による「はしがき」、次に「第一 品川湾に於ける開陽艦長室の激論」から「第八 旧主従二十年目の邂逅」までの八つのジオラマ展示の解説、「函館戦争実況絵はかきに題す」とした詠草²、最後に楽天の著書『五稜郭史』の案内からなる。なお、『五稜郭史』の「申込所」として片山禮という人物の名が見えるが、彼は当時函館に居住していた楽天の六男である。

文中に懐旧館の名は見出せないが、「はしがき」中に「本館」ということばが見えることに加え、内容から判断しても本資料が懐旧館に関連するものなのは明らかである。ただし、懐旧館ではジオラマ展示のほか、「時ノ勇士ノ遺品、遺墨、写真、記念品、参考品、油画、各種ノ図面、文章等ヲ陳列」³していたというが、

それらについては言及されていない。

「はしがき」には「大正六年八月」の日付が見えるものの、これは懐旧館開館の年月であり、本資料の成立時期を意味するものではない。大正一〇年（一九二一）に出版された楽天の著書『五稜郭史』の案内が見えることから、この年以後、懐旧館が閉館になった同一五年（一九二六）までの間に成立したものと理解できる。すなわち、本資料は開館後しばらく経った時期に印刷されたものである。

「場面解説」と銘打つてはいるものの、内容は大部分が展示されている登場人物のセリフ（あるいは独白）を講談調に書いたものである。これは、懐旧館において各場面に添えられていたキャプションをそのまま活字にしたものようだ。

また、表紙の外題の脇に「金五銭」という印記がある。楽天は函館区に懐旧館設立を申請する際、「大金五銭軍人学生等金二銭」を徴収する許可を求めているので、⁴恐らくこの五銭というのは入館料であろう。察するに、この入館料を払った者に対し、展示観覧の便宜として無償で本資料を提供したのではないだろうか。

印刷・頒布されたものという資料の性質上、伝存例が多くとも不思議はないのだが、管見の限りでは函館市中央図書館・国立国会図書館で異本を確認できたのみである（以下、それぞれ函図本・国図本と省略）。ただし、函図本・国図本とも所蔵館において独立の一文献として扱われていない。というのも、函図本は懐旧館発行の絵葉書（請求記号：PC000389）の付属品として扱われており、一方国図本は、楽天の著書『五稜郭史』（請求記号：396-204）の巻末に綴じ込まれている。

また、成立時期が異なるためか、それぞれ内容にはかなりの異同がある。国図本を例に挙げると、まず外題が「精神修養資料函館戦争の実況場面解説 全」とあって本資料と異なる上、展示解説本文にも明らかな差異が認められ

る。また末尾には『五稜郭史』の案内の代わりに「函館氷の由来」という記事が見える（函館本も同様）。これは、五稜郭公園の堀で採取されていた「函館氷」の紹介文である。『五稜郭史』発行後しばらく経ってから、函館氷の紹介に代えてその案内を挿入したものであろうか。とすれば、函館本・国図本よりも、本資料の方が成立時期が新しいものと推察される。

3

本資料の「はしがき」に名がみえる片上楽天は、五稜郭懐旧館の館主を務めた人物である。管見の限りその名を事典類で見いだすことができないので、簡単に経歴を確認しておこう。

片上楽天（一八五七カ〜一九二六年）は、伊予松山藩領の出身⁵。幼名を片上良之助といい、のちに片上良を名乗る。また、無為庵楽天と号した（本稿では「楽天」の称で統一する）。生家は野間郡波止浜村（現在の今治市波止浜）で月番所役人をしていた家という⁶。本資料の「はしがき」に「世々徳川の末流を汲める老生」とあるのは、親藩である松山藩に仕える家に生まれた、という意であろうか。

楽天みずからが記すところによれば、松山藩が西洋兵学を採用するに当たり、母方の叔父の推挙によって少年の身でありながら喇叭手になったという。「長州領八代島征伐の事と成り予は喇叭手として軍に従ったというが、これは第二次長州征討における周防大島（屋代島）の戦闘に従軍したということであろう。この戦いで松山藩兵は四国諸藩の先鋒をつとめ緒戦で勝利を収めたが、最終的には長州藩諸隊の攻撃で大敗を喫している。これがもとで楽天の属した松山藩は朝敵とされ、土佐藩兵に城を明け渡すという屈辱を味わっている。年少だった楽天は、この事件に大きなショックを受けたことだろう。

その後、慶応四年（一八六八）に縁者で小松藩領千束村の庄屋であり、「儒者」でもあった黒川與一右衛

門という人物に随行し、江戸に上った。楽天としては「適当ノ学校ニ入ル」ことが江戸入りの目的だったという。⁸ところが、折しも榎本武揚率いる旧幕府艦隊が品川を出帆するに際し、楽天も黒川に随行して艦隊に投じることになってしまい、「小父の命ずる俛に乗船」したという。

周知のとおり、旧幕府艦隊はその後蝦夷島を占領し、箱館に臨時政府を樹立、新政府軍と箱館戦争を戦うことになる。ただし、楽天の書いた文章をよく読むと、艦隊に乗り込んだところまでは明記しているものの、箱館戦争に加わったとは書いていない。⁹何らかの事情で戦闘には加わらなかったようである。

だが、一時的とはいえ、旧幕府脱走軍と行動をとめたことは、楽天にとって人生を左右する体験となった。彼は旧幕府方に身を置いていたという強烈なアイデンティティをその後も有しつづけたらしく、晩年に至っても「元佐幕軍少年隊」「幕軍遺兵」「幕軍残党」「維新役残卒」などの肩書を好んで使った。¹⁰また、晩年の楽天が箱館戦争の戦死者を「戦友」「亡友」と呼び、その雪冤と慰霊に異常なまでの献身ぶりを見せるのも、彼らと同道したというこの強烈な経験のゆえであろう。

一二歳で明治の新時代を迎えた楽天は、明治十一年（一八七八）には愛媛県師範学校小学校速成師範科を卒業し、小学校訓導補という職を得た。¹¹ほかに波止浜村の「村長」を務めたという話も伝わっている。¹²その後明治二三年（一八九〇）には松山市に移り、司法省執達吏として松山区裁判所に勤務した。¹³

ところが、明治後期になると、「家道の傾」いたことにより（楽天の四男・第六子の竹内仁による表現）、楽天は職と住居を転々とすることになる。¹⁴明治三十三年（一九〇〇）八月以後わずか一〇年あまりの間に、松山から香川・徳島・高知、北海道へ渡って根室、さらに国後島の留夜別村へと転居をくり返すという、まさに流転の日々を送ったのであった。¹⁵楽天自身ものちにこの歳月を「指を各種の方面に染めしも総て失敗不成功トント面白ふなかりし」と自嘲気味に回想している。¹⁶

そして大正元年（一九一二）には、函館五稜郭で箱館戦争戦没者の遺体の身元調査を始めたと楽天は述べている。¹⁷これが事実であれば、恐らくこの年までに国後島から函館に移ったのだろう。日本が大正という新時代に入るとともに、楽天も転居と転職のくりかえしだった人生に一区切りをつけ、新天地に落ち着いたのである。

以後、楽天は函館を終の棲家とした。大正六年（一九一七）に五稜郭懐旧館を設立する際の趣意書においては、「我函館ヲ愛スルヲ敢テ人後ニ落チザル」「我郷土タル函館」とまで記し、その愛郷心を吐露している。¹⁸みずから設立した五稜郭懐旧館では館主をつとめ、ここを拠点に箱館戦争の研究と旧幕府脱走軍の顕彰、戦没者の慰霊に力を注いだ。晩年の著作に『五稜郭小史』、その増補版というべき『五稜郭史』がある。

大正一五年（一九二六）六月八日、心臓麻痺で死去した。数日後に懐旧館も閉館となっている。

妻は節といい、今治藩の御用人の娘だったというが、楽天に先立ち明治三八年（一九〇五）に死去。その後、池田マサを後妻に迎えている。男女合わせて九人の子たくさんだったが、なかでも長男の片上伸は、早稲田大学教授、ロシア文学・プロレタリア文学理論の紹介者として知られている。¹⁹

ところで、懐旧館の運営に当たっては、楽天と連名で函館区に設立を申請した教師の大西亀三郎（号は五泉 一八五三―一九一八年）²⁰、五稜郭公園の看守だった北島勇之進（一八六五―一九四六年）の存在も無視できない。²¹また、楽天は他にも、五稜郭史談会・函館戦争戦死者弔霊義会といった五稜郭・懐旧館関係の団体を結成しており、多くの協力者を得ながら活動したようである。

ただし、懐旧館が片上楽天の死をもって閉鎖されているところを見ると、やはり活動の中心は楽天個人だったことがうかがえる。また、懐旧館関係の出版物については、本資料や後掲の絵葉書なども含めてその多くが「片上楽天」の名で、あるいは「片上発行」として世に出ている。少なくとも懐旧館の出版事業に関し

ては、楽天の個人的な活動の側面が強いものと見ることができそうだ。

4

懐旧館の展示内容については、前稿でも検討を加えたが、ここでは本資料にもとづいて再考してゆきたい。こんにち誰しもが不可解に思うのは、^レどのような意図でこれらの場面を選択したのだろうか^クという点であろう。この展示は「函館戦争実況」と題されているものの、そもそも戦闘場面が表現されていない上、箱館戦争をめぐる一連の歴史的経緯のなかで重要な場面を取り上げているとも考えられない。たとえば、第六場面に見られる古屋作左衛門の湯治の姿を、箱館戦争の描写に不可欠な場面とする者はいないだろう。つまり、箱館戦争の全体像を提示しようという意図がこの展示からは読み取れないのである。では、懐旧館の展示はなぜこのような構成を取ったのであろうか。

この点について考えるためのキーワードは、表紙に見られる「隠れたる史実」ということばであろう。何が「隠れ」ているかという点と、箱館戦争における旧幕府脱走軍の思想と動向なのである。

本資料の「はしがき」は、この点について次のように説いている。箱館戦争における「榎本將軍等」の真意は世に伝わらず、「賊軍」としてのみ世に知られている。つまり、この戦争で勝利した新政府が明治という新時代を築いた結果、箱館戦争は新政府の視点からのみ語られ、「賊軍」とされた旧幕府脱走軍の動向や言い分が語られる機会は少なかった。しかし、この状況は「徳川の末流を汲める」楽天にとっては忍びざるところである。そこで、ジオラマ展示によって「維新当時の徳川武士が如何に国家に忠にして義を重んじ情に厚かりし乎」を伝え、「精神修養」に役立てたい。つまりは、旧幕府脱走軍の言動を伝えることで、「精神修養」の手立てとしたい、としている。

「精神修養」は本資料の外題にも用いられており、楽天が強調している語なのが分かる。別の資料においても、「精神修養」について説くなかで、楽天は「現代ノ人情紙ヨリモ輕佻浮薄ノ風日々月々加ハル」という認識を示している。時代は大正デモクラシーの世になりつつあったが、幕末生まれの楽天としては、大正時代の新思潮よりも「維新当時の徳川武士」の忠義心にこそ価値を見出していたのであろう。

ただし、この「精神修養」の語を額面通りに受け取れるかどうかは、疑う必要があると筆者は考えている。すでに前稿で論じた点であるが、楽天が「榎本將軍等」を顕彰するのは単に教育に資するという理由だけではなかった。「はしがき」では明言していないものの、「榎本將軍等」の顕彰をはかることは、同時に彼らを「賊軍」扱いにした明治新政府を糾弾する政治的な姿勢につながりかねない。さらには、彼らの名誉回復・雪冤をはかるべきという声にもつうじる。実のところ、楽天のねらいは旧幕府脱走軍の雪冤を果たし、戦没者も含めて名誉回復を成し遂げることにあつたのである。強調される「精神修養」の語には、楽天のそうした真意をカモフラージュする意図もあつたと考えられる。

以上のような趣旨で設立された懐旧館は、旧幕府脱走軍が「如何に国家に忠にして義を重んじ情に厚かりし乎」という世に「隠れたる」箱館戦争の側面を提示することを主目的としていた。そのため、新政府軍の動向を伝える必要はなく、また箱館戦争の全体像を提示することも考えていないのである。

最後に、各場面の具体的内容についても、気づいたところを指摘しておきたい。

第一に、「はしがき」に「榎本將軍等」とあるとおり、楽天は榎本こそ旧幕府脱走軍のシンボルと認識している。それゆえ、懐旧館の展示は榎本武揚の言動を中心としている。第一・三・五・八場面に榎本が登場し、しかも第一・八場面については箱館戦争と直接のかかわりがないにもかかわらず「函館戦争実況」の一場面として採用されている。さらに、第二場面も有名な『万国海律全書』をめぐるエピソードを表現したもので

あり、これまた榎本が影の主役といってよさそうだ。恐らくこれらは、旧幕府脱走軍のシンボルとして、五稜郭の守将だった榎本の言い分や人となりを伝え、彼に従った旧幕府軍全体の顕彰をはかるねらいであろう。

第二に、懐旧館の展示の特徴として、楽天が独自に発見した「史実」を重視する姿勢が認められる。

一例を挙げると、第六場面は衝鋒隊隊長の古屋佐久左衛門の湯治、第七場面は同じく衝鋒隊の幹部となった火消人足藤吉（梶原雄之助）の活躍ぶりを再現している。あまり著名人物とも思われないこの二人を取り上げたのはなぜか。展示解説をよく読んでみると、この兩人には五稜郭内において新政府軍の「巨弾」（甲鉄艦による砲撃）を浴び、重傷を負った人物という共通点が認められる。

そこで想起されるのは、楽天が懐旧館設立の五年も前から、五稜郭内で戦没者の遺体の身元を調査していた点である。当時、古屋や藤吉は五稜郭内で被弾し、死亡したと見られており、郭内で発見された遺骨の一部は藤吉のものと認識されていた。大正七年ごろ楽天は藤吉の事績を調べるため、わざわざ上京したことも新聞で報じられており、また国図本では、第七場面の付記として「山岡鉄舟氏の推挙に依りて宮内省に奉職し 先帝陛下の馭者を勤め天寿を全ふせりと確聞す」とある。聞き取り調査の結果実は生存していた藤吉の動向を「確聞」するに至ったものと察せられる。また、楽天は人見寧、田村銀之助（第五場面に登場）といった旧幕府軍参加者、薩摩藩士恒吉休右衛門の遺族といった人々とも親交を結んでいるので、彼らからも往時の貴重な証言を得ていたことであろう。

すなわち楽天は、箱館戦争についてみずから調査した成果をジオラマとして再現するという姿勢に立っているのである。もちろん、登場人物のセリフや独白については、楽天の想像の産物と考えられるため、虚構がまったく含まれていないわけではない。とはいえ、楽天は旧幕府軍の顕彰という大目的のために、歴史を捏造しているわけではないという点は強調しておきたい。いわば楽天が独自の調査で掘りおこし、楽天の

想像力でもって演出した「史実」を再現して展示しているのである。

楽天のいう「隠れたる史実」ということばには、世間で公に語られてこなかった、知られざる旧幕府脱走軍の「忠君愛国」の言動²⁴という意味とともに、楽天が独自調査の結果知りえた、ほかでは知られていない歴史の真実²⁵という自負も込められているのかもしれない。

最後に、観光振興の視点である。恐らく最も不可解なのが、古屋が湯治をしている第六場面にどういう意味があるのか、という点であろう。実はこの場面については、楽天自身が開館式の際、「温泉の特効を具体的に説明したものです」と説明している²⁴。そもそも懐旧館を設立するにあたり、楽天は「来観者招致」による函館の「繁栄策」という意味合いも込め、またその副次的な目的として湯の川温泉の紹介を掲げていた²⁵。その役割を担ったのが、この第六場面であると見ることができよう。

箱館戦争にかかわりのあった楽天としては、半世紀を経ても「朝敵」扱いをされたままの旧幕府脱走軍の名譽を回復したいという強烈な思いがあった。そうした楽天の個人的かつ政治的な思惑が、懐旧館設立の主要な動機であったと考えられる。

ただし、懐旧館の展示を見ると、楽天はみずからが手間をかけて掘り起こした信頼できる「史実」を再現し、またあわせて函館の観光振興をも視野に入れて展示を構成していたことがうかがえる。こうした楽天の郷土史家としての真摯な姿勢と郷土振興の思いも、五稜郭懐旧館という特異な資料館を語る上で無視できない要素であろう。

〔注〕

- 1 拙稿「片上楽天と五稜郭懐旧館——懐旧館旧蔵資料に見るその活動と思想——」（岩下哲典・「城下町と日本人のこころ」研究会編『城下町と日本人の心性』岩田書院 二〇一六年）。以下、「前稿」と称す。
- 2 ここていう「函館戦争絵はがき」とは、後掲の図3のような懐旧館の展示を写した絵葉書のことである。
- 3 『楽天心事の一部 亡友建碑の事』のうち「建碑発願要旨摘録」。これは、楽天による五稜郭内への慰霊碑建立の請願書類（一九二六年四月二四日付）である。田原良信氏から写真を提供していただいた。
- 4 『創業書類』（市立函館博物館蔵、懐旧館旧蔵資料）のうち「入場料徴収理由具申」。
- 5 楽天の生年は、「享年七十歳」で没したという「函館毎日新聞」大正十五年六月一日付、第二面の死亡記事から逆算した。
- 6 「伊予細見」第八一回 片上伸「不定の故郷」再訪（http://www.francewave.tv/~iyosaiken/saiken/2003_03.php）。
- 7 片上楽天『五稜郭史』第四版（懐旧館 一九二六年）一三三頁。
- 8 前掲『楽天心事の一部 亡友建碑の事』のうち「蛇足附記 函館戦争ト私」。
- 9 たとえば、著書『五稜郭史』においては、「往時は佐幕の旗を翳して長州八代島征伐なんぞと弥次りし身。顧へば当時戦線こそ東西幾百里を隔てたりとは云へ。函館戦争の幕軍諸士とは共に戦友」と往時を振り返っている（前掲『五稜郭史』「五稜郭史発行の趣旨」の「そへがき」。また、「函館戦争ト私」という記事においても、旧幕府艦隊に乗じて「北走ヲ供ニ為タ」としか書いていない（前掲『楽天心事の一部 亡友建碑の事』のうち「蛇足附記 函館戦争ト私」。箱館戦争と直接のかかわりを持たなかったかのような書きぶりである。
- 10 片上楽天旧蔵資料（市立函館博物館所蔵）中の『達磨畫像百態之内』と題された折本や、「行脚ノ趣旨目的」と題した懐旧館発行の絵はがき（函館市中央図書館蔵）などでこの肩書を使っている。
- 11 柴田幸生「五稜郭懐旧館と片上楽天」（SARANIP 市立函館博物館館報）第三号 一九七一年）には「小学校速成師範科」を卒業したとある。愛媛県師範学校には漸成科（二年間）・急成科（半年間）があり、これは急成科のことと思われる。愛媛県教育センター編・発行『愛媛県教育史』第一巻（一九七二年）四三九・四四〇頁。
- 12 大西貢編「片上伸年譜」（『現代日本文学大系』五四 筑摩書房 一九七三年）四二五頁。楽天の長男伸はわずか四

- 歳の時、学齢に達していないにもかかわらず父の楽天が「村長」だったため特別に波止浜小学校に入れたという挿話が伝わっている。なお、楽天が小学校や村役場に勤務してたのは、恐らく兄の片上保憲が波止浜村の「村吏」をしながら七番小学校の教員を務めていたことと関係があるであろう。『維新前寺子屋・手習師匠・郷学校・私学校の調査』二 今治市・越智郡・松山市・温泉郡（愛媛県立図書館蔵）。前掲『伊予細見』第八一回。
- 13 『職員録』明治二十四年（乙）（内閣官報局 一八九一年）五四頁。以下同様に、明治二五年から二八年分までの甲巻に、松山裁判所執達吏として「片上良」の名が見える。
- 14 竹内仁遺稿刊行会編『竹内仁遺稿』（イデア書院 一九二八年）二五八頁。
- 15 簡単にたどると、まず明治三十三年（一九〇〇）八月以後香川へ、ついで徳島・高知、同三八年八月には「北海道根室牧場」へ転居。同四一年六月には「根室新聞社」（おそらく北友社か根室時事新聞社のことであろう）に入社するが、早くも翌年四月に退社。八月には、国後島の留夜別村戸長役場に奉職し、戸長に就任するが、これも明治四四年一月に辞任している。以上は、前掲『五稜郭懐旧館と片上楽天』三頁、前掲「片上伸年譜」四二五頁、前掲『竹内仁遺稿』五三七頁、渡辺茂編著『根室市史』下巻（根室市 一九六八年）八一七頁、根室・千島歴史人名事典編集委員会編・発行『根室・千島歴史人名事典』（二〇〇二年）などを参照した。
- 16 片上楽天『五稜郭小史』（北島勇之進 一九一六年）五頁。
- 17 前掲『五稜郭史』、一一〇頁。
- 18 前掲『創業書類』のうち「五稜郭懐旧館設置趣意書」。
- 19 前掲「片上伸年譜」四二五頁。
- 20 大西亀三郎の生没年は、大西の孫にあたる木村ひさ氏のご指示による。
- 21 渡利フク『五稜郭とともに過した日々』（『地域史研究はこだて』第六号 一九八八）一〇六頁。
- 22 前掲『楽天心事の一部 亡友建碑の事』のうち「建碑発願要旨摘録」。
- 23 『函館新聞』大正七年八月四日付、第四面。
- 24 『函館新聞』大正六年八月八日付夕刊、第三面。
- 25 前掲『創業書類』のうち「五稜郭懐旧館設置趣意書」。

〔資料の紹介〕

以下、本資料の全文を翻刻する。なお、末尾に図2として五稜郭懷旧館の展示第一～六場面の写真（懷旧館旧蔵資料、市立函館博物館蔵）を、図3として第七・八場面を写した絵葉書（筆者所蔵）を掲載する。あわせて参照されたい。

〔凡例〕

- 漢字は原則として常用漢字に改めた。
- 原本には全文に振り仮名が施され、また人名等に傍点を付してある部分もある。これらは一部をのぞき省略した。
- 筆者による注記は、「〔 〕」で示した。
- 「河野文庫」「五銭」「北海道立図書館蔵書」の印記があるが、ここでは省略した。これらについては、図2を参照されたい。

〔表面〕

賜
久邇宮朝融王邦久王兩殿下台覽之榮

精神修養資料
函館戦争実況場面解説

五稜郭史拔萃。隠れたる史実研究

は し が き

函館戦争に於ける幕臣榎本將軍等の真意は世に伝へられず徒らに賊軍と而已認められんとするは世々徳川の末流を汲める老生の忍びざる処なるを以て曩に『五稜廓小史』をものして世に公けにせしも根が貧弱なる小冊子、所期の目的を得難きを覚えたれば百尺竿頭更に一步を進めて有形歴史と為し以て維新当時の徳川武士が如何に国家に忠にして義を重んじ情に厚かりし乎を示して幕軍の真意を明らかにし、聊か精神修養の資たらしめんとせり。之れ此計画ある所以なり。

本館は史実の宣明を主眼とし毫も営利を希はず故に敢て人形之美を銜はず只管史実に過ち勿らんと努めたり今その一例を挙げんか時はこれ北地の五月まだ残んの雪ありて花なし。場処は多く十五尺の高壘に包まれし稜城内なれば遠く海上を展望すべからず。然れば背景に花卉を加へ遠景に真風含める白帆を描くを許さず登場人物の如き今日や死なん明日や討れんの悲惨時。何の暇あつて髪を理し服を飾り得べき殊に前年来の悪戦苦闘に心身共に疲労せる場合、意氣稍く鎖沈（鎖）のうち凜として冒し難き威厳ありし実況に勘へ深き注意を払つて製作せしめ且つ場面の幕に印せる紋章の如きも出来得る限り各場主人公の家紋を調査採用したる等人知れぬ苦心の潜める事を諒せられよ。

大正六年八月

立案者 片 上 楽 天

◎第一 品川湾に於ける開陽艦長室の激論

《国を護り産を興し……▲併せて旧主の恩に報いんとす》

(慶応四年八月十八日)

勝 如何に榎本氏既に大將軍徳川公恭順を表せられたる今日無名の兵を動かし朝廷に弓を彎くは不敬不忠宜しく速かに兵を解きて帰順せられよ。

榎本 是は異なる言を承はる者哉。抑も釜次郎等此度の挙は世世の禄を失ひ方向に迷へる徳川武士を率ゐて蝦夷に渡り不毛の地を拓き自ら耕し自ら食ふの途を得せしめ。併せて産を興して御国の富力を増進するの傍ら。他日我国と事を構ふる時根拠地と為さんの野心を以て漫りに北地要港の測量を為す外艦を防ぎて国家百年の安全を図り。徳川家の一人を以て其統御者に任用あらん事を請願して徳川家の祀りを断たしめぬ様と存するに外ならねば折角なれど御勸告には従ひ兼ね申す。

勝 御説一応適理なれど尚ほ不安の念を禁じ得ぬ。宜しく御再考あれ。

榎本 武士に二言はふりませぬ。御再説御無用に願はしう存ず。

勝 それでは是非に及ばぬ。然れば寸時も早く解纜せられよ。

◎第二 官軍参謀黒田了介の居室

(明治二年五月十二日)

《天下の偉人を亡はんを歎き……▲寄贈の珍書を見て感更に深し》

黒田 天晴当代の英傑、御国の為に最惜しき巨人なれど騎虎の勢ひ止むに止まれぬ場合ならん。折角贈り越したる兵書他日翻訳して世に頒たば国家に益する処多からん而して榎本の志も亦空しかるまじ。此上はセメテ精酒など贈つて彼等同志の労を犒ふも武士の至情。

◎第三 榎本大総裁将に自刃せんとす

(明治二年五月十四日)

《身を殺して仁を為す……▲忠僕石川の苦諫》

榎本 弓折れ矢尽きたれど今一戦を試み潔く討死せんと思へ共。斯くては徒らに朝敵てう汚名を蒙むり多くの勇士を失ふ訳。如かじ一死以て同志の助命を請はんには。と認めたる一封ヤヨ石川大儀なれど此書面を黒田官軍参謀の許へ持参せ

石川 御命畏み奉つれど此お手紙は如何なる御用にて候哉。

榎本 問ふ迄もない明日決戦の通告じや早く行け！

石川 以為らく吾を出し遣り其後にて御自害と覚えたり要こそあらんと出し振りして小蔭に潜み様子如何にと窺がへば果せる哉自刃の用意スハ事ぞと飛鳥の如く駆け込み。

石川 御短慮にて候ぞ御無念は然る事なれど今日迄の悪戦苦闘に依て旧主徳川家への御忠誠は尽されつらん今は潔く御帰順遊ばされ戦死せし者の遺族や生残れる同志の末路を保護してお遣り成さるが御仁徳に候はずや。因に云ふ石川治兵衛は本名を大塚鶴之丞と云ふ。將軍の自刃を諫止し短刀を没義取らんと為し時右手の指四本に傷を負へり。

◎第四 千代ヶ岱陣屋中島兄弟永別の盃

《日本武士の本領……▲孝子父の難に殉ず》

(明治二年五月十五日)

恒太郎 天なる哉命なる哉。我軍の兵勢日に非なれば父上には明日を最期と定め給ひしと覚えたり吾等とて争で後れを取るべき華々敷一戦を試み父上の御供せんと思ふが如何に。

房次郎 仰の通り不肖とて何少女くと生を措み申すべき潔く御供申さん。

兄 伊美敷申す者哉。然れば永別の一献酌ふぞ。

弟 有り難く戴き申さんイザ兄上より御始めあれ。

腰元 惜しや未来の名將たるべき若様御二人。大殿様の御供と御覚悟。お留め申さん便もなし。此上はお国に御座る御三男様をお守り立申上げ天晴名將と成らせ給はん事を御祈り申上さん。

主將 砲兵頭 花に比すれば未だ咲き初めぬ荅の若者むざとく死なすも武門の習ひ是非もなし。嗚呼為まじき者は宮仕へなる哉。

◎第五の一。五稜城内訣別の宴

(明治二年五月十六日)

《稜城を枕に全滅を期す……▲敗残勇士の鉄腸》

榎本 松平副総裁を始め諸君に痛く御苦勞を備へました。然れど事皆志と違ひ最早今日に及んでは如何とも致方ムらぬ。成敗は兵家の事と諦め今夕は打寛ぎ黒田が好意の酒を開きて且つ飲み且つ語り静かに敵の総攻撃を待ち城を枕に永き夢路を辿り申さう。併し之で徳川家に対する恩誼万分の一に酬いたると同時に義を泰山の重きに比する徳川武士の本領を後世に印し得るをセメテもの土産として泉下の祖先に見え申さん。

〔裏面〕

松平 仰せの通り縦し事は成らざりしも今日迄の悪戦苦闘に依つて眼前の營利榮達に眼暗める腰抜け武士の心胆を寒からしめ。

大鳥 三河以来の士風を發揮し。花は桜か桜井の駅に散にし菊水の響に傲ふ。

荒井 武夫の亀鑑を後の世の人に示し得たりとせば夫れで満足。

一同 榎本大総裁閣下今日迄の御心勞厚く御礼申上げん。

榎本 ヤヨ田村卿は未だ幼年今無慙死なすに忍びぬ。去つて余命を全ふせ。

田村 之れは將軍の仰せとも心得ませぬ若輩とて侮り給ふな。十四歳の死が惜ければ五十、八十、百歳の死も尚ほ惜しと思ひ申さん。銀之助は今が死に時。死に花と心得ます。

榎本 豪い斯くてこそ日本益良雄。一盞参らう卿が得意の劍舞一番。冥土へ旅立の饑別せ。

田村 勤王の一戦北門に抱る。碧血は奔流す郭外の村。病兵を叱咤して億馬に鞭てば。飛丸雨の如し桔梗ヶ原。

◎第五の二。最高幹部の再評定

(明治二年五月十六日夜)

《軍議一変甘んじて戮に就き……▲八百の部下を救ふ四将の心事》

榎本 弁天砲台降り千代ヶ岱陣屋屠られ今は孤城落月。此上の抵抗は無意義に八百の勇士を失ふのみ諸君の御賢慮如何に。

松平 御意の如く最早我々の面目武士の意気地をのみ主張する秋に非ざらん。

大鳥 如かじ衆に代つて官に降り。

荒井 潔よく天裁を仰ぎ。

榎本 八百勇士の助命を請はん。

三人 御同感に候ぞ。

◎第六 古屋衝鋒隊長湯の川湯治

《病床に在つて後事を案じ……▲憐れ異郷の露と消ゆ》

(明治二年五月下旬)

古屋 如何にもして天晴武士の本分を尽さんと誓ひし事も仇なれや。武運拙なく敵艦の巨弾五稜城内訣別の宴席に破裂し憐れ負傷の身と成りし無念さ。然れど霊泉の効に由つて快方に向ひたれば隊に復して亦活動せん。

因に云ふ隊長歩兵頭店屋佐久左衛門は余病併発遂に湯の川に歿す。

◎第七 江戸火消小頭藤吉の義憤

《野州佐久山の活劇……▲徳川思ひの纏ひ持》

(慶応四年二月七日)

藤吉 吾徳川お抱へ十人火消の小頭纏持として安穩に世を渡りしも將軍様のお蔭。今又新募の義勇兵として改役に迄昇りしも徳川様のお情。然るに鳥羽、伏見の戦ひ敗れてより某藩の人々坊主上りの公卿と結託して

強て錦旗を自己の藩に請ひ奉り。將軍様を朝敵呼はり遂に三百年來の御座処たる江戸城より徳川様を追はんとの噂さ奇ッ怪千万今一分別せざれば將軍様は如何な憂目にお会ひ成さるかも知れぬ。好し先んずれば人を制すと聞く。先づ庄内藩に頼寄り徳川家の再興を囃らんと。一千有余の同志を率ゐ野州迄来て見れば既に將軍様に刃向ひせん徒輩の入込み居るこそ面白けれ。イザ越え来れ此棍棒の味ひ見せん。

因に云ふ藤吉は一介の新募兵より差図役を経て改役即ち今の大尉に迄昇進し名を梶原雄之助と改め蝦夷各地に転戦し勇名を恣にせしが不幸明治二年五月十六日前節の古屋隊長負傷と同時に巨彈の爲め惨死を遂げたりと伝へられしが実は一時氣絶して人事不省に陥りしも戦友の看護に由りて蘇生し維新後石井某方に入夫と成り山岡鉄舟翁の推挙にて宮内省に奉職し 先帝陛下の馭者を勤め天寿を全ふせり。

◎第八 旧主従二十年目の邂逅

《此主人にして此従者あり……▲義と情の結晶》

(明治二十一年四月三日)

石川 御前お懐かしう存じ升。御見忘れ遊ばせし哉。

榎本 珍らしや石川。卿の事は片時忘れねど其後絶て久敷消息を得ぬを遺憾に思ひ居りしが能く健康で居て呉れた嬉しいぞ。併し強う寢れたのう。兎まれ途上で話しも出来ぬ。此馬車に同乗して予が邸に行う。

▲向島なる榎本子爵邸の奥座敷

榎本 顧ひ起せば二十年昔し予は朝敵の汚名を蒙りたる佞骨と朽つべかりしを卿の切なる忠言に因つて今日あるを得たる訳。云はゞ卿は予が命の親にして又我家名誉の恩人忘れて成らう哉。何故早く尋ね越ざりしぞ余処には見ぬ者を。

石川 之れは御前の仰せとも心得ませぬ。御白刃の時お留め申上げたは従士の任務を仕りたる迄、治兵衛に寸効も入りませねば御恩に被て戴く謂れ露程も有ぞとは存じませぬ。然るに石川落魄で伺へば寸効なき事を

恩ケ間しく御無心に出し様世人に後を見らるゝ事の心苦しさ御懐しさを忍んで態と御無沙汰仕りました。榎本 斯く迄窮して尚ほ往昔の魂に鏘は着けぬか。天晴れ武士の龜鑑。見あげたぞや何は兎もあれ今後は予が引受た老後を安うせ。

因に云ふ石川治兵衛事大塚鶴之丞は子爵に邂逅して直ちに通信省に任用され榎本通信大臣に事へ後ち官を辞し北海道に於ける榎本家の地処支配人と成り小樽に住し樂しき老を送り明治四十年病歿し遺族は東都に移れり。

函館戦争実況絵はかきに題す

御国思ふ兵どもが矢叫びの昔しを偲ぶ便とも為ん

片上 楽 天

五 稜 郭 史

申込所 函館大隊官舎道見付片上禮

定価 金 六拾錢

五稜郭と函館戦争に就て諸君の重なる疑問は

▲五稜郭は何の要あつて誰が何時築きし乎 ▲榎本勢は何の目的にて蝦夷に來りし哉 ▲函館戦争の起りは何乎其終りは如何 ▲西郷南洲翁が榎本勢の拳を忠君愛国の士と賞せし理由 ▲朝敵たる者が死に処せられざりしは何故ぞ ▲維新後榎本子等の優遇されし理由……等ならん本史は之れが解決の鍵。……諸君が想像の外隠れたる史実満載。

図1. 「精神修養資料函館戦争実況場面解説」の冒頭部分

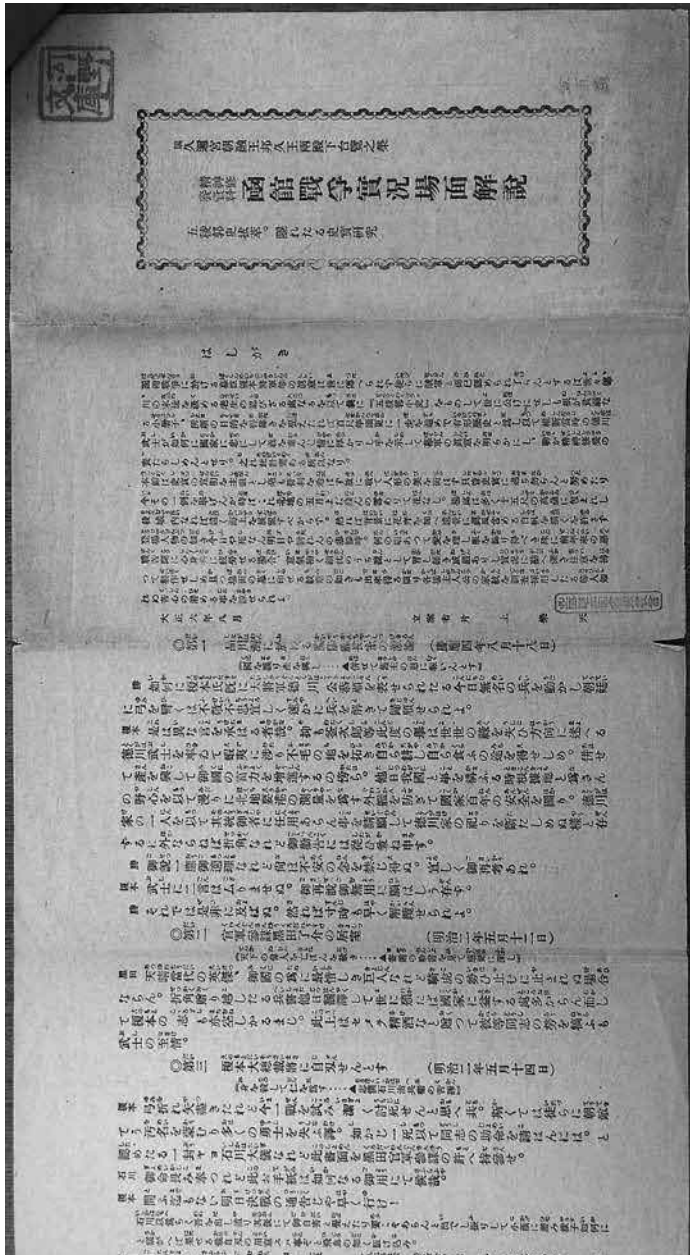




図2の1. 第一場面 品川湾に於ける開陽艦長室の激論



図2の2. 第二場面 官軍参謀黒田了介の居室



図2の3. 第三場面 榎本大総裁將に自刃せんとす



図2の4. 第四場面 千代ヶ代陣屋中島兄弟永別の盃



図2の5. 第五場面 五稜城内訣別の宴



図2の6. 第六場面 古屋衝鋒隊長湯の川湯治



図3の1. 第七場面 江戸火消小頭藤吉の義憤



図3の2. 第八場面 旧主從二十年目の邂逅

〔付記〕 北海道立図書館・市立函館博物館には、所蔵資料を紹介することについてご許可をいただいた。また、田原良信氏・木村ひさ氏・伊藤尚氏には、貴重な資料を提供していただくなど、多くのご教示をいただいた。心より御礼申し上げる。

なお、本稿は平成二九年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。